中世期日本語比喩表現の収集の試み

菊地 礼（国立国語研究所）†

An Attempt to Collect Japanese Figurative Expressions in the Middle Ages

Rei Kikuchi(National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本発表は、日本の中世期（鎌倉～室町時代）のテクストから比喩を収集する試みについて報告する。現在、日本語の比喩研究は、現代語を中心としてデータベース化が進められ、実証的な研究の機運が高まっている。古語は内省の効かない研究対象であるため、実例ベースの研究が求められる。しかし、日本の古語の比喩を実証的に研究するための研究資源が整備されていない。そのような現状を鑑み、『日本語歴史コーパス』に『分類語彙表増補改訂版』『日本古典対照分類語彙表』の分類語彙表番号を付与したメタデータ「CHJ-WLSP」を用いて、日本の古語、特に中世期のテクストから比喩を収集し、分析に必要な情報のアノテーションを行う。本項はデータベース構築の概要と現状の作業済みデータの分析例を報告する。特に、『方丈記』『虎明本狂言集』から収集した比喩について、比喩の種別、比喩を形成する構文と文法形式、比喩を構成する意味分野について記述する。

1. はじめに

1.1 研究対象と目的

本発表は古代日本語の比喩の実態解明を目的としたデータベースの構築の試みについて述べる。現在、日本語の比喩研究は現代語を中心として進められている。一方で、古語の比喩の研究は進展していない。古語は内省がきかないため、実例をベースにして研究を進める必要がある。しかし、研究資源となる比喩の実例データが整備されていないため、個々の研究者の用例収集に依存している。そこで、『日本語歴史コーパス』（以下、CHJ）に『分類語彙表』及び『日本古典対照分類語彙表』の分類語彙表番号を付与したメタデータである CHJ-WLSP（浅原ほか 2022）を用いて比喩を収集し、関連データをアノテーションした比喩のデータベースを構築する。その構築方法と現状で収集した比喩の分析事例を示す。

1.2 研究背景と問題

先にも述べたように、日本語の比喩研究は現代語を中心的な対象として進められている。概念メタファー理論（Conceptual metaphor theory）を背景とした理論的研究（鍋島 2011、2016）が主である。しかし、近年では加藤ほか（2021）及び Kato, et al（2022）が『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いた比喩の収集によるデータベース構築を行い、加藤（2023）は『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告 57）を電子化し、データベースとして活用できるようにしている。また、Komatsubara（2021）・小松原（2023）は「青空文庫」所収の日本近代文学作品から比喩をはじめとしたレトリックを収集し、意味・文法・表現効果に関する情報をアノテーションした「J-fig 日本語レトリックコーパス」を構築して

† re-kikuchi○ninjal.ac.jp（○→@）

いる。実証的な比喩研究の機運が高まっている。

一方で、日本語の古語の比喩研究は進展が見られない。これには古語という対象の性質と用例収集の難しさが原因にある。半沢（1979）、半沢（1981）などによる研究もあるが、特定の作品や比喩の種別に偏り、比喩の使用実態の全体像や意味・文法的メカニズムは未解明である。古語は内省のきかない研究対象であり、実例をベースにして研究を進めることが求められる。多門（2006）は中古・中世・近世の散文資料から幅広く用例を収集し、丁寧な記述を施す。古語の比喩の用例集としての使用も意図されているが、電子データではないため、活用の幅は限定的である。つまり、実証的な研究を進めていくうえで必須となるオープンアクセスの形で公開される日本の古語の比喩のデータは存在しない。その状況を鑑みて、古語の比喩のデータベース構築を行う。特に、中世期（鎌倉～室町）の資料を対象とする。これは当該年代が近代語へと変化する過渡期であり、比喩の収集しやすさや比喩の変化を見ることもできるといった利点があるためである。

2. データベース構築の概要

2.1 対象テクスト

CHJ 所収の鎌倉・室町期のテクストを対象とする。対象テクストは、説話（『今昔物語集（本朝部）（1120 年以降成立）』『宇治拾遺物語（1213～1221 年ごろ成立）』『十訓抄（1252 年成立）』）、随筆（『方丈記（1212 年成立）』『徒然草（1330～1331 年ごろ成立）』）、狂言（『虎明本狂言集（1642 年成立）』）とする。これらはジャンル・文体（和漢混交文、擬古文、口語）・時代が異なるため、実態を偏りなく見るために適する。

対象となるテクストには『分類語彙表』及び『日本古典対照分類語彙表』の分類語彙表番号が付与された Excel 形式のメタデータ（CHJ-WLSP）がある。比喩の収集作業には本データを用いた。

1	meta	boundary	orthToken	lemma	wlsp	pSampleID	pStart	類	類ラベル	部門	部門ラベル	中項目	中項目ラベル	分類項目	分類項目ラベル
2	0900竹取	B				20-竹取0900_00001	10								
3	0900竹取	I	いま	今	1.1641	20-竹取0900_00001	20	1	体	1	関係	16	時間	1641	現在
4	0900竹取	I	は	は		20-竹取0900_00001	40								
5	0900竹取	I	むかし	昔	1.1642	20-竹取0900_00001	50	1	体	1	関係	16	時間	1642	過去
6	0900竹取	I	、	、		20-竹取0900_00001	80								
7	0900竹取	I	たけとり	竹取		20-竹取0900_00001	90								
8	0900竹取	I	の	の		20-竹取0900_00001	130								
9	0900竹取	I	翁	翁	1.2050	20-竹取0900_00001	140	1	体	2	主体	20	人間	2050	老少
10	0900竹取	I	と	と		20-竹取0900_00001	150								
11	0900竹取	I	いふ	言う	2.3102	20-竹取0900_00001	160	2	用	3	活動	31	言語	3102	名
12	0900竹取	I	もの	者	1.2000	20-竹取0900_00001	180	1	体	2	主体	20	人間	2000	人間
13	0900竹取	I	あり	有る	2.1200	20-竹取0900_00001	200	2	用	1	関係	12	存在	1200	存在
14	0900竹取	I	けり	けり		20-竹取0900_00001	220								
15	0900竹取	I	。	。		20-竹取0900_00001	240								

図 1：CHJ-WLSP

短単位ごとに行が分けられ、それぞれに分類語彙表番号（wlsp）が付与されている。これにより、比喩を構成する短単位の意味分野を確認することもできる。『宇治拾遺物語』『十訓抄』『方丈記』『徒然草』は全文に対して意味分類番号が付与されている[1]。『虎明本狂言集』は一部（「あさいな」「かみなり」「ゑさし」「ばくろう」「せいらい」）に付与され、『今昔物語集（本朝部）』はコアデータのみに付与されている[2]。

---

[1] 付属語などは『分類語彙表』に該当する番号が無いため、CHJ-WLSP 内では付与されていない。

[2] コアデータとして用いられているのは、鈴鹿本を底本とした 12 巻・17 巻・20 巻・27 巻・29 巻であ

2.2　比喩の収集手順

上記の CHJ-WLSP を上から逐次テクストを確認し、比喩に該当する短単位をマークすることで比喩の収集を行っている。同作業にあたっては、日本古典文学を専攻する作業者一名と発表者のダブルチェックを行っている。

比喩の同定は個人の主観的判断に頼るところが大きく、作業の妥当性を担保することが難しい。そのため、比喩の判定手順である MIP（Metaphor Identification Procedure）（Pragglejaz Group2007）及びそれを拡張した MIP-VU（Metaphor Identification Procedure VU University Amsterdam）（Steen et al. 2010）を採用した[3]。本手法は Kato, et al（2022）でも使用しており、日本語の比喩の収集における妥当性は確認されている。これにより修辞性の高い比喩から概念メタファーのような一般に比喩とは気づくことの難しい比喩まで幅広く収集することができる。

（1）くさむらの蛍は、遠く槙のかがり火にまがひ、<u>暁の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり</u>。

（30-方丈 1212_00011,4590[4]）

（2）いはむや、<u>深く思ひ深く知らむ</u>人のためには、これにしも限るべからず。

（30-方丈 1212_00011,6020）

（1）は暁方に降る雨の音を風に散る木の葉の音に喩える表現である。類似した表現は現状のデータ内では確認されず、比較的独自性の高い比喩と判断できる。一方で、(2）は「思ふ」や「知る」といった思考・知覚を「深く」と表現する。これは抽象的な事柄を深さを持つ容器のように表現するものである。これは概念メタファー（Lakoff & Johnson 1980）の一種の「容器のメタファー」と考えられ、人間の認知を支える慣用的な比喩と見られる。

る。約 15 万短単位であり、本朝部全体の約 30%の分量である（池上尚「『今昔物語集（本朝部)』のデータについて」)。

[3] 比喩の判定手順は以下の通りとなる。

1. Read the entire text–discourse to establish a general understanding of the meaning.
2. Determine the lexical units in the text–discourse
3. (a) For each lexical unit in the text, establish its meaning in context, that is,
   how it applies to an entity, relation, or attribute in the situation evoked by the text (contextual meaning). Take into account what comes before and after the lexical unit.
   (b) For each lexical unit, determine if it has a more basic contemporary meaning in other contexts than the one in the given context. For our purposes, basic meanings tend to be
   —More concrete
   —Related to bodily action.
   —More precise (as opposed to vague)
   —Historically older.
   Basic meanings are not necessarily the most frequent meanings of the lexical unit.
   (c) If the lexical unit has a more basic current–contemporary meaning in other contexts than the given context, decide whether the contextual meaning contrasts with the basic meaning but can be understood in comparison with it.
4. If yes, mark the lexical unit as metaphorical.

[4] 用例の出典は（サンプル ID,開始位置）で記す。

2.3　アノテーション

収集した比喩に研究を進める上で有用と思われる情報をアノテーションする。アノテーション項目は現在のところ、「比喩種別」「比喩指標」「結合情報」である。

2.3.1　比喩種別

比喩の種別をアノテーションする。比喩の種別は国立国語研究所（1977）における比喩の形式的な区別である「指標比喩」「結合比喩」「文脈比喩」に加え、「換喩」「提喩」を採用する[5]。

（3）朝に死に夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

（30-方丈 1212_00001,2340）

（4）はてには、朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりにき。

（30-方丈 1212_00002,1100）

（5）その主と栖と無常を争ふさま、いはばあさがほの露に異ならず。或は露落ちて、花残れり。

（30-方丈 1212_00001,3570）

（6）南、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚をつくり、北によせて障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかき、前に法花経を置けり。

（30-方丈 1212_00010,900）

（7）二年があひだ、世の中飢渇して、あさましき事侍りき。

（30-方丈 1212_00005,330）

（3）は指標比喩と呼ばれる比喩の一種である。指標比喩はおおむね直喩と重なる。「やうなり」「ごとし」「と見ゆ」のような比喩の形式的な指標を有する表現である。ここでは「ただ～ぞ似たりける」という構文を形式的な指標としている。

（4）は結合比喩と呼ばれる比喩の一種である。結合比喩はおおむね隠喩と重なる。「やうなり」などの形式的な指標を有さず、異なる意味的カテゴリーに属する語の結合による表現である。「一夜のうち」の時間表現「一夜」と空間的な内外を表す「うち」が結合され、時間を空間的に表わす表現となっている。

（5）は文脈比喩と呼ばれる比喩の一種である。文脈比喩はおおむね諷喩と重なる。「やうなり」などの形式的な指標を有さず、かつ句・節・文を作り上げている各要素の意味的な結合にも一見逸脱が存在しない表現である。「露落ちて、花残れり」は一文だけを見ると、露のこぼれる花の描写である。しかし、前文の「その主と栖と無常を争ふさま」によって、人事に関する表現であることが理解される。前後文脈との関係で初めて、比喩と判断することができる。

（6）は「普賢菩薩の絵」を「普賢」と省略的に記述する。これは「漱石を読む」（漱石の小説作品を読む）のように、隣接関係をもとにした転義が生じており、換喩と判断される。

（7）は平安京が飢餓に苦しむことを記述したものである。「世」という広いカテゴリーによって、「平安京」というメンバーを指示しており、カテゴリー：メンバー関係の転義が生じ

---

[5] 換喩と提喩の区別については佐藤（1978）、瀬戸（1995）を参照した。

ている。提喩として判断される。

2.3.2　比喩指標

「指標比喩」と判定した例に対して、その形式的な指標に関する情報を記入する。指標比喩は、比喩の形式的な指標を有した表現である。その形式的な指標となる構文全体を「比喩指標」と呼び、構文を構成する要素を「比喩指標要素」と呼ぶ（国立国語研究所 1977）。指標比喩を構成している比喩指標を記述した。

いは	言う					指標比喩	いわば～異ならない	「いはばXに異ならず」
ば	ば							
あさがほ	朝顔							
の	の							
露	露							
に	に							
異	異							
なら	なり							
ず	ず							

図 2：比喩指標の記述

これにより、どのような構文が比喩を形成し、その構文を形成するためにどのような文法カテゴリーに属するアイテムを用いていたかなどを見ることができる。つまり、中世期の比喩の文法形式的な側面を確認することが可能となる。現代日本語の比喩の形式的な指標は国立国語研究所（1977）や鍋島（2016）、小松原（2023）などにより明らかとなっている。どのような文法的な要素が古語の比喩表現の形式的な指標となるかは、現状では確定していない。そのため、本データベース構築により、探索的な収集が有効となる。

2.3.3　結合情報

CHJ-WLSP は、『分類語彙表』及び『日本古典対照分類語彙表』の分類語彙表番号を付与したメタデータである。そのため、マークした比喩を構成している語の意味番号も同時に確認することができる。特に、「結合比喩」は、その比喩を構成している語の意味分野の結合を抜き出して記述した。

我	我が								3.1040
おもは	思う								2.3061
ず	ず								
も	も								
無常	無常					結合比喩		3.1200 / 1.5151	31200
の	の								
風	風								1.5151
に	に								
さそは	誘う								2.3520
れ	れる								
、	、								
只今	只今								3.1641
めいど	冥土								1.2600
に	に								

図 3：意味の結合情報の記述

これにより、どのような意味分野の語が結合することで逸脱的な表現を形成し、比喩を創り上げていたかを見ることができる。つまり、中世期の比喩の意味的な側面を確認することが可能となる。図 2 では「無常の風」という結合比喩に対して「3.1200（相-抽象的関係-存在）

ノ 1.5151（体-自然物及び自然現象-風）」と記述し、意味の結合が確認しやすいようにしている。

3. データの分析例

本節では、以上の手順で構築作業を進めているデータベースを用いた分析事例を紹介する。現在、対象テクストのうち『方丈記』『虎明本狂言集』への比喩マーカーの付与を終えている。この二つのテクストにおける「比喩の種別」「指標比喩」「結合比喩」を概観する。

3.1 比喩の種別

『方丈記』と『虎明本狂言集』に出現した比喩の種別が表 1 である。出現数（粗頻度）と 1000 語（短単位）当たりの出現頻度（調整頻度[6]）を挙げる。調整頻度の値の降順で並べている。

表 1：比喩の種別と頻度

『方丈記』			『虎明本狂言集』		
比喩種別	粗頻度	調整頻度	比喩種別	粗頻度	調整頻度
文脈比喩	58	12.6	文脈比喩	59	12.8
結合比喩	55	11.9	結合比喩	41	8.9
換喩	35	7.6	指標比喩	11	2.4
指標比喩	25	5.4	提喩	11	2.4
提喩	21	4.6	換喩	8	1.7
？[7]	9	2.0	？	5	1.1
その他[8]	1	0.2	その他	0	0
合計	204	44.3	合計	135	29.3

『方丈記』から確認する。調整頻度の第一位は文脈比喩（12.6）であり、第二位は結合比喩（11.9）となる。次に、換喩（7.6）が続き、指標比喩（5.4）、提喩（4.6）と続く。

『虎明本狂言集』を確認する。調整頻度の第一位は文脈比喩（12.8）であり、第二位は結合比喩（8.9）である。次に、指標比喩（2.4）と提喩（2.4）が続き、換喩（1.7）と続く。

両者の結果から確認できることを述べる。まず、両テクストとも文脈比喩の出現頻度が最多であり、次点として結合比喩が続く。特に、『虎明本狂言集』は第三位以下の種別の出現頻度が 2.5 を下回っており、文脈比喩の 12.8、結合比喩の 8.9 を大きく下回っている。比喩として文脈比喩・結合比喩を主に用いる様子が確認できる。

Kato, et al（2022）が『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のコアデータからの比喩の収集

---

[6] 調整頻度の算出にはテクストを構成する短単位の全数を用いた。ただし、記号類（カッコ、句読点など）は除く。『方丈記』の全短単位数は 4,607 であり、『虎明本狂言集』の全短単位数は 4,591 である。

[7] 「？」は比喩種別の判定が現状で確定できていない例を示す。

[8] 「たましきの都のうちに棟を並べ、甍を争へる高き賤しき人の住ひは〔後略〕」（方丈記-1212_00001,850）における枕詞「たましき」を「その他」として収集した。

調査によると、指標比喩が 337 例、結合比喩が 9,983 例[9]、文脈比喩が 1,368 例、換喩が 2,336 例、提喩が 370 例となる。現代日本語では結合比喩が非常に多く出現し、次点で換喩が出現しやすい。文脈比喩が最多で、次点が結合比喩となる『方丈記』『虎明本狂言集』の結果とは異なる比喩の出現分布であることが分かる。現代日本語と古代日本語で用いる比喩の種別が異なるのだと予測される。

3.2　指標比喩

本節では『方丈記』『虎明本狂言集』に出現した指標比喩を確認する。特に、指標比喩を構成する比喩指標と比喩指標要素の一覧を見る。比喩指標及び比喩指標要素の認定は国立国語研究所（1977）を参考にした。まずは比喩指標から確認する（表 2、表 3）。

表 1：『方丈記』の比喩指標の一覧

「X、またかくのごとし」「ただ X にぞ似たりける」「いはば X に異ならず」「X がごとく Y になりぬ」「X がごとくして」「X、Y がごとし」「X を Y のごとく Z」「X に異ならず」「X、Y がごとくすれども」「X のたとへにかなへり」「X、Y のごとし」「X、Y に異ならず」「X と見えしかど」「X、たとへば Y がごとし」「X に似たり」「いはば X がごとし」「X のごとくして」「X、Y にたとへつべし」「X はおのづから Y に似たり」「X なり」「X もまた同じ」「X 驚く程の Y」「X に Y を類える」

表 3：『虎明本狂言集』の比喩指標の一覧

「X は Y のごとく」「X 程に」「X も Y やうなり」「たださながら X のごとくなり」「たださながら X のごとく Y」「X がごとくなり」「X 心地して」「X やうに Y」「X のごとく」「X は Y のごとく」「X は Y のごとくにして」

『方丈記』から確認する。23 種の比喩指標が用いられている。『方丈記』の指標比喩の粗頻度は 25 であったため、同じ比喩指標を二度以上用いる例の少ないことが分かる。

『虎明本狂言集』を確認する。11 種の比喩指標が用いられている。『虎明本狂言集』の指標比喩の粗頻度は 11 であったため、延べ数と異なり数が同じとなる。同じ比喩指標を使い回さない様が確認できる。

両テクストともに、比喩指標の異なり数が多く、様々なヴァリエーションを用いていることが分かる。サンプル数が少ないため即断はできないが、現代語では助動詞「ようだ」を用いた直喩、その中でも連用形「ように」を用いた「X（の）ように Y」が指標比喩（≒直喩）の中でも出現数が突出して多い（小松原 2023）のと対照的な結果である。

次に比喩指標を構成する文法形式である比喩指標要素の一覧を確認する（表 4、表 5）。

---

[9] ただし、Kato, et al（2022）では比喩の形式的な指標（MFlags）と結合（Combinations）の収集であり、この数がそのまま指標比喩と結合比喩の数と見なせるかは考慮が必要である。

表 4 :『方丈記』の比喩指標要素一覧

品詞	比喩指標要素
助詞	「の」「に」「が」「して」「ども」「しかど」「を」「ぞ」
助動詞	「ごとし」「たり」「けり」「ず」「ぬ」「つ」「き」「べし」「なり」
動詞	「似る」「異なる」「する」「なる」「かなふ」「見ゆ」「たとふ」「驚く」「類ふ」
副詞	「また」「かく」「いはば」「たとへば」「おのづから」
名詞	「たとへ」「程」
形容詞	「同じ」

表 5 :『虎明本狂言集』の比喩指標要素の一覧（下線部は表 5 と重なる例）

品詞	比喩指標要素
助詞	「は」「<u>の</u>」「<u>に</u>」「も」「<u>が</u>」「<u>して</u>」
助動詞	「<u>ごとし</u>」「やうなり」「<u>なり</u>」
動詞	無し
副詞	「ただ」「さながら」
名詞	「<u>程</u>」「心地」
形容詞	無し

『方丈記』から確認する。比喩指標要素として出現する品詞には、助詞・助動詞といった付属語から動詞・副詞・名詞・形容詞といった自立語まで確認できる。助詞には「の」「に」「が」「を」といった格助詞から係助詞「ぞ」、接続助詞「して」「ども」「ど」まで確認できる。助動詞には比況の「ごとし」、アスペクトの「たり」「つ」「ぬ」、テンスの「き」「けり」、みとめ方の「ず」、モダリティ「べし」「なり」の出現が認められる。比況助動詞だけが比喩を構成するのではないことが分かる。動詞には、「似る」「異なる」「類ふ」といった類似性に関わる語、「なる」のような変化に関わる語、「かなふ」「見ゆ」「驚く」といった発話者の知覚・感情に関わる語、「たとふ」のようにメタ的に比喩であることに言及する語が確認できる。副詞には前文と後文が同様であることを表す「また」、指示副詞「かく」、自発の「おのづから」、メタ的に比喩であることに言及する「いはば」「たとへば」が確認できる。名詞にはメタ的に比喩であることに言及する「たとへ」や程度の「程」が確認できる。形容詞には同一性を表す「同じ」が確認できる。多様な意味的カテゴリーが比喩を形成していることが分かる。

『虎明本狂言集』を確認する。比喩指標要素として出現する品詞には、助詞・助動詞といった付属語から副詞・名詞といった自立語が認められる。動詞・形容詞は認められない。助詞には「は」「も」といった取り立ての係助詞、「の」「に」「が」といった格助詞、「して」のような接続助詞が確認できる。助動詞には比況の「ごとし」「やうなり」、モダリティの「なり」が認められる。副詞には限定の「ただ」、比況の副詞「さながら」が認められる。名詞には程度の「程」や発話者の感情に関わる「心地」が認められる。

両者の違いを述べる。まず、『方丈記』では「やうなり」の出現が認められないが、『虎明本狂言集』では出現している。「やうなり」は現代語の比喩の代表的な助動詞「ようだ」の

前身である。比喩を表す「やうなり」の用例自体は平安時代から確認できる（永野 1969）。また、『虎明本狂言集』では取り立ての係助詞「は」「も」の出現が認められる。『方丈記』では「X、またかくのごとし」のように無助詞の構文が用いられたのに対し、『虎明本狂言集』では「X は Y のごとく」のような主語・主題を助詞でマークしながら叙述する構文が用いられるようになったのである。13 世紀初頭の『方丈記』から 17 世紀前半の『虎明本狂言集』の 400 年の間に生じた助詞・助動詞の歴史的な変化が比喩の構成にも影響を及ぼす様が確認できる。

また、比喩指標要素に用いられる助動詞として、『方丈記』ではアスペクト・みとめ方・テンス・モダリティといった多様な文法カテゴリーに関わる文法形式が認められたが、『虎明本狂言集』では比況助動詞とモダリティの「なり」のみである。さらに、『方丈記』では豊富に認められた動詞の比喩指標要素が『虎明本狂言集』では出現しない。多様な意味・文法的カテゴリーを駆使して比喩を形成する『方丈記』と比況助動詞や比況副詞を用いて比喩を形成する『虎明本狂言集』という対比が見える。

3.3　結合比喩

最後に、『方丈記』『虎明本狂言集』の結合比喩を確認する。結合比喩は先述したように、結合する要素の意味的な逸脱によって比喩性を獲得する。どのような意味的な結合が見られるかをここでは確認する。ここで「X の Y」「X は Y」の前項 X を「結合要素①」とし、後項 Y を「結合要素②」と呼ぶ。まずは結合の延べ数と異なり数を確認する（表 6）。

表 6：結合の延べ数と異なり数

	延べ	異なり
方丈記	55	48
虎明本狂言集	41	23

『方丈記』は異なり数が大きく、様々な種類の結合のパターンが存在することが分かる。一方で、『虎明本狂言集』は『方丈記』と比較すると異なり数が小さく、同じ結合のパターンが複数回出現する様子が分かる。次に、用例数（粗頻度）が 2 以上の例を表 7、表 8 に掲げる。なお、確認の便宜のため、意味番号は中項目までを示す。

表 7：『方丈記』の結合比喩の意味番号（頻度 2 以上）

結合要素①	結合要素②	用例数
1.26（体-人間活動の主体-社会）	1.17（体-抽象的関係-空間）	3
3.19（相-抽象的関係-量）	2.30（用-人間活動-心）	3
1.30（体-人間活動-心）	1.56（体-自然物および自然現象-身体）	2
1.30（体-人間活動-心）	3.19（相-抽象的関係-量）	2
1.19（体-抽象的関係-量）	1.16（体-抽象的関係-時間）	2

表 8：『虎明本狂言集』の結合比喩の意味番号（頻度 2 以上）

結合要素①	結合要素②	用例数
1.26（体-人間活動の主体-社会）	1.47（体-生産物および用具-土地利用）	11
3.12（相-抽象的関係-存在）	1.51（体-自然物および自然現象-物質）	4
1.34（体-人間活動-行為）	2.30（用-人間活動-心）	4
1.19（体-抽象的関係-量）	1.16（体-抽象的関係-時間）	2
1.26（体-人間活動の主体-社会）	1.17（体-抽象的関係-空間）	2

『方丈記』と『虎明本狂言集』で頻度 2 以上の結合に重複が無い。一方で、要素ごとには重なりが見られる。結合要素①に用いられる意味分野としては、「1.26（体-人間活動の主体-社会）」「1.19（体-抽象的関係-量）」が重なる。人間社会の事柄や量的な事柄が比喩に用いられやすいことが分かる。結合要素②に用いられる意味分野としては、「2.30（用-人間活動-心）」が重なる。人間の心理に関わる表現の多いことが分かる。

同時代の他のテクストの傾向は現在時点で未調査のため即断できないが、『方丈記』は同じ結合を使い回さない傾向が見て取れる。一方で、『虎明本狂言集』では「1.26（体-人間活動の主体-社会）＋1.47（体-生産物および用具-土地利用）」の結合が 10 回以上繰り返される。これは「六道の辻」の例であり、地獄を舞台とする場合に出現する固定的な言い回しである。演じることを前提とした狂言作品であり、口頭表現がテクストを構成していることによって、このような固定的な言い回しが多く出現すると推測される。

4. おわりに

本発表では、古語の比喩の実態解明を目的としたデータベース構築の概要と現時点で収集されたデータを用いた分析事例を示した。サンプル数は少ないが、比喩を構成する文法形式の違いや文体による比喩的な言い回しの出現の違いなどを明らかにした。

本データベースを構築することにより、Kato, et al（2022）や小松原（2023）が構築している近代語、現代語の比喩のデータベースに、古語の比喩のデータベースが加わる。各時代の比喩を概観することが可能となり、比喩の通史的な研究を可能とする。また、作品ごと、ジャンルごとでの比較も可能となるため、各作品の特徴やジャンルと比喩の運用の関係などを明らかにすることもできる。特に、Kato, et al（2022）は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）に『分類語彙表』の意味番号を付与した BCCWJ-WLSP（加藤ほか 2019）を用いており、本発表が紹介したデータと構築手法やアノテーション項目などの共通点が多い。これにより、現代と古代で比喩を形成する意味分野の違いなどを確認することもできる。比喩の実証的な通時的研究を遂行していくことにつながる。

謝辞

本研究は科学研究費助成事業若手研究「中世期日本語比喩表現の収集とその分析」（23K12198）の助成を受けたものである。

参考文献

浅原正幸・池上尚・鈴木泰・市村太郎・近藤明日子・加藤祥・山崎誠（2022）「分類語彙

表番号を付与した『日本語歴史コーパス』データ」日本語学会 2022 年度春季大会発表予稿集.
加藤祥・浅原正幸・山崎誠（2019）「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」『日本語の研究』15 巻 2 号、pp.134-141：日本語学会.
加藤祥・菊地礼・浅原正幸（2020）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」『自然言語処理』27 巻 4 号、pp.853-887：言語処理学会.
Kato Sachi, Kikuchi Rei, Asahara Masauyki（2022）”Figurative Expression Information Database on `Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’”, 15th Researching and Applying Metaphor Conference, abstract.
加藤祥・浅原正幸（2023）「『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与」『国立国語研究所論集』25 号、pp.1-19：国立国語研究所.
国立国語研究所（1977）『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57：秀英社.
国立国語研究所編（2004）『分類語彙表増補改訂版』大日本図書.
Komatsubara Tetsuta，2021，”The Corpus of Japanese Figurative Language : Toward a comprehensive framework for describing figurative language”,『国際文化研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』55 号、pp.107-134：神戸大学大学院国際文化学研究科.
小松原哲太（2023）「『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用：直喩へのアノテーションの事例」『国立国語研究所論集』24 号、pp.45-58：国立国語研究所.
佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社.
瀬戸賢一（1995）『メタファー思考』講談社現代新書.
多門靖容（2006）『比喩表現論』風間書房.
永野賢（1969）「ようだ - 比況＜現代語＞」（松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社、pp.313-318）.
鍋島弘治朗（2011）『日本語のメタファー』くろしお出版.
鍋島弘治朗（2016）『メタファーと身体性』ひつじ書房.
半沢幹一（1979）「上代の比喩表現について-「共通性」と素材との関連から-」『国語学研究』19 号、pp.36-47：東北大学文学部国語学研究室内「国語学研究」刊行会.
半沢幹一（1981）「万葉比喩論序論-直喩の認定と表現形式」『共立女子大学文芸学部紀要』27 号、pp.319-347：共立女子大学.
宮島達夫・石井久雄・安部清哉・鈴木泰（2014）『日本古典対照分類語彙表』笠間書院.
Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*.Chicago:University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)(1986)『レトリックと人生』東京:大修館書店).
Pragglejaz Group（2007）”MIP: A Method for Identifying Metaphorically Used Words in Discourse.” *Metaphor and Symbol* 22（1）, pp.53-62.
Steen, G. J., Dorst, A. G., Herrman, J. B., Kaal, A., Krennmayr, T,. and Pasma, T.（2010）. *A Method for Linguistic Metaphor Identification*. John Benjamins Publishing

関連 URL

池上尚「『今昔物語集（本朝部）』のデータについて」（https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-kamakura-2016.pdf）